T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	続・コロナの時代の語学教育－東工大スペイン語のオンライン合同授業の記録－
Title	
著者	渡辺暁
Authors	Akira Watanabe
出典	FLS言語文化論集 POLYPHONIA, Vol. 14, , pp. 57-87
発行日	2022, 3

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

続・コロナの時代の語学教育
——東工大スペイン語のオンライン合同授業の記録——

渡辺　暁
(WATANABE Akira)

はじめに

東工大における第二外国語としてのスペイン語科目は、2020年度から、つまりコロナ禍と同時にはじまった。本稿は、2021年度の第4クオーター開始前後（12月はじめ）に執筆された、2020年度から2021年度におけるオンライン授業の記録である。なお、スペイン語科目の立ち上げから2020年度の第3クオーターまでの記録については、昨年度の報告（渡辺 2021a）をぜひご参照いただきたい。題名からもわかるように、本稿はその続編として書かれたものである。

周知の通り——今後その事実が忘れ去られるときがくるかもしれないが、本稿執筆時点においては！——新型コロナウィルスの流行に伴い、多くの大学で2020年度からオンライン授業が導入された。その後、様々な形での対面授業への移行の動きも見られたが、2021年度にも多くの大学で、少なくとも一部の科目ではオンライン授業が継続されている[1)]。

本稿は2021年度の東工大における、オンライン授業の内容や形式を中心とする授業運営の記録である（東工大以外にも、筆者が非常勤講師として教えている慶應義塾大学での授業のようすにも、一部言及した）。本稿執筆の主たる動機は、以下の2つである。まず第一に、今後対面授業が復活していくとしても、オンライン授業という形式で授業を行ったという事実はなくならない。その経験を今後の大学教育の改善に生かしていくためにも、この2年間の授業を振り返り、総括しておくことは、重

要ではないかと考えたためである。

もう一つの理由は、2年目の授業を行ううちに私たちの授業にもさまざまな変化・進化があり、昨年度書いた授業記録（渡辺 2021a）に付け加えることがたくさんあったからである。授業用のパワーポイントなど、昨年の記録を参考にしながらも、私自身も少しずつ工夫をした結果、そしてそれ以上に、一緒に授業を担当してくださっている先生方が、新しい知見を獲得し、それを披露して下さったおかげで、授業が少しずつ変化・進化しているという感覚が、授業をしているときからあったが、本稿執筆にあたり、久しぶりに「コロナの時代の語学教育」前編を見直す中で、その感覚がやはり正しかったことを再認識するに至った。本稿では後ほど、その具体例として、第3クオーターに扱った再帰動詞とgustar型動詞構文をとりあげ、2020年と2021年の説明の内容の変化について述べる。

大学のオンライン授業については、たとえば熊本大学教授システム学研究センター（2021）による「オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言（2021.3）」のような立派なガイドもすでに出ており、たとえば、オンラインでの授業の経験を今後の授業の進化のために生かしていくべきだ、という本報告 の提言も、すでに彼らによってなされている。ただ、もし本報告に教育「論」としてのオリジナリティがあるとすれば、それは、具体的な授業の内容を紹介することで、実際にこんなやり方が生まれたのだ、ということを示し、オンラインで教えることの具体的な改善点を示していることであろう。結論でも再度触れるように、こうした授業の実践のあり方がもっと書かれることで、大学での授業は、学生にとっても教員にとっても、楽しく面白く、そして学びの多い場になっていくのではないか。

本稿の構成は以下の通りである。第1節では、「コロナの時代の語学教育」の内容を簡単にまとめ、2020年度の東工大を中心とする筆者のオンライン教育の経験を振り返る。第2節では2021年度の東工大のスペイン語合同授業の新しい展開について、初級の授業を中心に報告する。第3

節では、「この経験をどう今後に活かすか」と題し、対面授業復活後の授業のあり方について考察する。そして最後の第4節では、それ以外の授業、具体的には東工大で新しく始まったネイティブ教員による会話主体の授業ならびに他大学でのオンライン授業の経験にも言及しながら、本稿の内容をまとめる。

なお、授業報告としての内容は以上であるが、付録として、東工大の『外国語だより』に書いた「ネット上の動画で学ぶスペイン語」(2022年発行第6号掲載予定：2021年8月に原稿提出済み、2022年1月に一部加筆修正）に追加の映像とその解説を加筆した、スペイン語動画ガイドをつけておく。『外国語だより』は現状ではオンライン化されておらず、基本的には東工大の関係者の目にしか触れることがないため、本稿にも付録としてそれを掲載することで、こうした動画のセレクションがより多くの学習者や教員の目に触れることを期待するためである。

1 コロナとともにはじまった東工大スペイン語プログラム

東工大における第二外国語としてのスペイン語プログラムは、文字通りコロナとともにはじまった。2019年のかなり寒くなった時期に筆者の着任が内々定し、そこから他にも非常勤講師の先生を探し始めるという、かなりスリリングな展開で授業準備が進んだ。授業を担当して下さる最後の1人にお声掛けをして、なんとかご了解いただいたのは、なんと2020年の1月下旬であった。

授業をご担当くださったのは、木村秀雄先生（人類学・アマゾン／アンデス)、杉守慶太先生（政治学・メキシコ）佐々木充文先生（言語学・ナワトル語)、永田由紀子先生（社会学・米墨国境）の四人の先生方である。なお、2021年には前期だけではあったが、ペルーアマゾンの先住民シピボの生業と彼らを取りまく環境の問題を研究する大橋麻里子先生が加わり、私も含めた教員6名のうち半分がラテンアメリカの先住民言語を話すことができるという、おそらく他に例を見ないチームとなった。

授業計画の策定については、前任校の山梨大学や、他に非常勤講師と

して教えてきた様々な大学のカリキュラムを念頭に、1年半で文法を終えるカリキュラムとなるようにシラバスを書いたが、他のヨーロッパ言語では1年で初級文法をおさえるとのことであったので、年度の途中でプランを変更し、最後はかなり駆け足になりながらも、文法事項を一通り終えることとした。特筆すべき点としては、通常の教科書では最後に出てくる接続法の説明を、過去形より前に教えてしまう、という、長年あたためてきた構想を実践したことがあげられる。

しかしなんと言っても、東工大の最初の二年間の最大の特徴は、合同授業というフォーマット、そしてそのなかで教員同士も学び合うという姿勢であった。2020年3月、新型コロナウィルスの流行により、授業開始は5月に延期され、またオンラインで行われることになった。教員のお二人にとって、これが大学教員としての初めての仕事だったという事情もあり、最初の数回は授業を合同で行うということにして、学期がスタートした。そうすることで、他の教員の皆さん、そして私の担当しないクラスも含めたすべての学生の皆さんに、私の教育方針が伝わるから、というのが、その時点での最も大きな理由だった。

しかし、何度かこのやり方で授業を行ううちに、これは実はオンライン授業に適した素晴らしいやり方なのではないか、と思うようになっていった。このZoomによるオンラインの語学の授業では、教員から学生への一方向の授業の部分に関しては、受講生が何人いても同じであり、だとしたら一人がずっと話すのではなく、各教員が分担して説明をし、またお互いにやりとりをすることで、学生の皆さんの集中力も保たれるのではないか、と考えるに至ったのである。（実際学生さんからも、掛け合いが楽しかった、という声も多くいただいた。）結果的にテレビの語学講座のような雰囲気が生まれたのではないかと想像する。

こうした試行錯誤の結果、以下のような役割分担ができていった。

1）授業資料は渡辺が用意し、毎回はじめに趣旨などについて説明する。
2）それに続き、佐々木先生・杉守先生・渡辺が基本的な文法事項の解

説を行う。

3）さらに、佐々木先生・木村先生が、より詳しく文法事項を解説。

4）発音練習は永田先生と大橋先生がメインで担当。会話文の練習は木村先生を中心に、つねに状況をイメージしながら行う。

5）永田先生が中心となって、授業の内容を適宜チャットに書き込む。

基本的にはこのような形で授業を行いつつ、後期には GoogleForm を使ったコメントシステムを導入するなど、少しずつ方式を整えていった。

2 二年目の進化・深化

合同授業の良さは、教員同士が学び合い、また新しい知見を提供することで、授業そのものが進化ないし深化していくところである。このことについて、昨年書いた「コロナの時代の語学教育（渡辺 2021a)」でも扱った再帰動詞を再び取り上げる。昨年もこの再帰動詞を扱った授業については 3000 字を費やして報告をしたが、今年はそれを踏まえつつ、さらに内容の濃い授業となった。本節の前半で昨年の授業の内容がどのようなものであったのかを簡単にまとめ、その上で今年はさらにどのような新しい展開があったのかを述べていきたい。

1）昨年の授業における再帰動詞についての説明

再帰動詞とは、「私は自分自身を起こす＝私はおきる」のように、主語の動作が目的語として自分に帰ってくる動詞のことである。ロマンス語ではよくみられる。例えば名前を名乗るとき、スペイン語だけでなく、イタリア語・フランス語でも、英語に直せば I call myself... という表現を用いる。

自分自身「を」という訳せる直接再帰と呼ばれる用法だけであれば、学生にも比較的理解してもらいやすいのだが、「自分自身に対して何かをする」（例えば「歯を磨く」、「服を着る（＝自分に服を着せる)」など）という、間接再帰と呼ばれる用法（こちらの方は学生にとって少々混乱

を招く）もあり、また他にも、「相互」用法、「受身」用法、「強調ないし転意」用法など、さまざまな用法があって、なかなか教えるのが難しい文法事項である。

筆者自身、すでに何年もスペイン語を大学レベルで教えてきたが、木村先生と佐々木先生の説明は非常に勉強になった。その内容を以下に簡潔にまとめておく。（より詳しくは、渡辺（2021a: 80-84）を参照。）

木村先生はまず、通常教科書で箇条書きになっている「用法」の分類は、文法的な区別と意味的な区別が混じっていると指摘された。文法的区別とは、その再帰代名詞が直接目的か間接目的の二種類であるはずであり、それ以外に相互用法や強意、受身といった、意味上の分類が一緒になっている、という指摘である。例えば同じ相互用法にしても、「私たちは愛し合っている」は直接目的だが、「私たちはお互いに文通する（手紙を相手に送る）」は間接目的である。

木村先生の説明の中でも特にすばらしかったのが、いわゆる「強意・転意」と呼ばれる用法である。スペイン語においては、行く、眠る、食べる、などの動詞にもなぜか再帰動詞の形があり、「ir = 行く」の場合でいえば「立ち去る」、「dormir = 眠るの場合であれば、眠りに落ちる、あるいは居眠りする」という意味になる。また、「食べる」という動詞にも再帰動詞があるが、もちろん「自分自身を食べる」という意味ではなく、「平らげる」という意味になる。「意味の微妙な変化」という説明もされる、この「強意・転意」用法についての木村先生の説明は、以下のようなものであった。

A)「行く」や「眠る」のような動詞は自動詞なので、再帰代名詞は間接目的でしかあり得ない。

B) 間接目的格であるということは、自分自身に対して、そうした動詞で表される行為が行われる、ということである。

C）つまり、自分自身に対する行為、という側面が強調されるため、「立ち去る」あるいは「眠りにつく」といった意味が加わるのだ。

佐々木先生も言語学の専門家として（スペイン語学、ではないところが彼の素晴らしさを物語っているのだが）、また違った角度から素晴らしい説明をして下さった。そちらについても箇条書きでまとめておく。

A）再帰動詞の一部の用法については、実はまだ定説はないものもある。

B）再帰動詞を用いることには「他動性を下げる」という要素があるのではないかという。例えばものが売られるという場合、スペイン語では se vende という言い方を良くする。直訳すれば、「その家は自分自身を売っている＝家は売りに出ている」という意味になるが、物が売られている、という状況においては、誰がそれを売っているか、よりも、売られているものの方が重要である。そのため、se を用いて、売り手の影響を小さくする、という意味合いがあると考えられる。（例えば、「殺された」のように行為者が重要になる場合は、英語の受身と同じような形で表現され、この se を用いた受け身は使われない。）

C）また、いわゆる「強意」と説明されている用法については、コントロールがなくなる、という共通点を指摘された。「眠る」の再帰形は「眠りに落ちる」（寝つく・だが、これは自分でコントロールできないものである。また、「食べる」の再帰形は「平らげる」だが、食べてしまったら食べ物がなくなってしまう、「行く」の再帰形は「立ち去る」だが、行ってしまったらその場には何も残らない、といった点でも、あるものに対してコントロールができなくなる、という共通点を指摘された。

筆者は昨年の時点で、この項をまとめるにあたり、以下のように書いている。

この「再帰動詞」の説明を通して、この授業の特徴として二つのことを指摘しておきたい。一つは初級の授業でありながら、文法的にはかなりつっこんだ、学生さんたちもそうだが、教える側としても教えながら疑問を抱くような「なぜ？」に答える授業であったこと、そしてもう一つは、一通りの説明ではなく、競合するようなさまざまな説明を複数の教員が学生に提示するような授業だった、ということである。このやり方が学生にとってどう届いたのか、もちろん難しすぎた、という面はあるだろうが、少なくとも、教員の説明が必ずしも「正しい」のかはわからない、ということが、語学についてもそうなのだ、ということが理解してもらえただけでも、大学における学問のあり方を示す一助となったのではないだろうか。（渡辺 2021b: 84）

2）再帰動詞と与格についての議論：二年目における「深化／進化」

このような文章を書いてほぼ1年後、再び再帰動詞を教える時期がやってきたが、今年の授業でも、木村先生と佐々木先生は、再帰動詞の性質として別の視点から新しい話をして下さった。（昨年書いたものを読み直して、あまりの違いに驚いたくらいである。）ここでは2021年度版の再帰動詞の授業、そして与格の代名詞を使ったgustar型構文と呼ばれる形についての説明をご紹介することで、東工大のスペイン語の授業の「深化／進化」について述べていきたい。鍵となるのは、未来の人類研究センターのメンバーのお二人、國分功一郎先生と中島岳志先生の、中動態と与格構文の話である。前項同様、木村先生と佐々木先生の授業でのご説明について、順番等をアレンジした上で再構成を試みる。

A）再帰動詞の説明を始めるにあたり、木村先生はまず、一人称・二人称と三人称の違いについて触れ、一人称と二人称については、私も君も一人しかいないが、三人称ではそうはいかないため、「その人自身」を表

す代名詞（自身の、という所有格や自身に、などの前置詞格）があることを指摘し、それと同時に目的格も存在する、それがいわゆる「再帰代名詞」であるという話から、説明を始めた。

B）再帰動詞と普通の動詞の違いは何か。木村先生は、自分の行為が自分の外に向かうのが、他動詞であり能動態であるのに対し、自分の行為が自分に戻ってくるという、つまり自分の行為が自分の外に出ないのが再帰動詞であること、そしてこれは、哲学者の國分功一郎氏の著書『中動態の世界』（國分 2017）をきっかけに注目を集めるようになった中動態の概念に非常に近いものだということを指摘された。

この中動態について、東京外国語大学言語モジュールでは、インドヨーロッパの古い言語で、「動作主が行なう動作が，自分自身に及ぶ場合」などに、使われたもので、近代ヨーロッパ言語においては、再帰動詞によって同様の役割が果たされている、と説明しているが、木村先生の再帰動詞、特に間接再帰についての説明もまさにそれであった。なお、スペイン語には間接再帰と呼ばれる構文があり、たとえば「手を洗う」は、“I wash my hands.” をスペイン語に直訳した “Lavo mis manos.” ではなく、“Me lavo las manos.” (lavo = I wash; mis = my; manos = hands; me = (for) me; las = the: スペイン語の文を英語に直訳すれば、“I wash the hands for me.” とでもするのが一番近いだろうか）となる。なお、木村先生ご自身がこれに関連して何度か例に出されていたのは「癒える」という動詞で、傷は「癒える」ものであり、他の誰かが「癒やす」ものではない、と繰り返しおっしゃられていたことを付記しておく。

C）スペイン語には再帰動詞としてしか使われない動詞があり、教科書によって、文字通り「再帰動詞としてのみ使われる動詞」と書かれていたり、「本質的再帰動詞」と書かれていたりする。後悔する・思い切って何かをする・文句を言う・自惚れる、といった動詞がこれにあたるが、なぜこれらの動詞は、再帰動詞としてしか使われないのだろうか。また、

「本質的再帰」という用語は何を意味しているのか。私はこれまであまりよく理解しないまま、授業で扱っていた。こうした疑問も、中動態の考え方を応用すればよく理解できる。これらの動詞は自分の感情の変化を表すものであり、もともと中動態としてしか使われなかった動詞だった。現在でも再帰動詞としてしか使われることがないのはそのため、と考えれば、理解するのは容易である。

D）この間接目的格の代名詞について、スペイン語にはもう一つ非常に興味深い文法事項がある。スペイン語では「好き」というのを表すのに、gustar という、直訳すれば「好かれる」を意味する動詞を使い、例えば「私はりんごが好き」という場合であれば、「りんごは私に好かれている」という言い方をする。この gustar を使った言い方について、佐々木先生は「好き、というのは好きになろうとして好きになるのではない、好きになってしまうのだ」という点において、「好きになる主体」以上に「好かれる対象」が主語となる必然性があり、他にもそういう言語は色々とある、という説明をされたが、これは中島岳志先生が「利他」についての文章で言及しているヒンディー語の与格構文に通じるものがある（中島 2021）。中島先生によれば、「私はうれしい」というのを、ヒンディー語では「私にうれしさが留まっている」と言い方で表現する。もちろん「私は愛する」のように主格を使っていう場合もあるそうで、スペイン語でも同じことが言えるが、こうしたヒンディー語の与格構文は、佐々木先生のいう与格の代名詞の使い方に通じるものがあり、また、何かを好きになる、ということはどのような心の動きなのか、という、哲学的な問いにも結びつくであろう。

＊＊＊

私はこうした先生方のお話を通じて、学生のみなさんが、スペイン語という、多くの方々にとって母語である日本語とも、これまで学習して

きた英語とも違う、別の言語を学ぶ意味を再認識してくれたら、と考えている。

また、これまでの学生さんのコメントに目を通してきた経験からいうと、学生さんが別の授業で聞いた話をまた聞くと、好意的な反応を返してくれることが多いように思っている。その意味でも、学生のみなさんが昨年度の立志プロジェクトの國分先生の講演で聞いた中動態の話を、木村先生がしてくださったことは、非常にありがたく、また学生さんたちにとって印象深いことだったと思う。このようにさまざまな科目の間の有機的つながりが（期せずして）生まれることで、東工大の教養科目のよさがさらに深まり、学生の皆さんに伝わるのではないか、と考えた次第である。

3 この経験をどう今後に活かすか：現時点での試論

この二年間のオンライン授業の経験を、今後の対面授業のためにどのように生かしていけるのだろうか。現時点ではもちろんわからないことも多いが、オンライン授業のこのような利点は、ぜひ今後も生かしていきたい、という点を列挙しておきたい。

1）少なくとも一部の授業を合同で行う

東工大のスペイン語のオンライン授業が（主観的ではあるかもしれないが）うまくいったのは、授業を合同で行い、教員もお互いに学び合いながら、学生の皆さんにかなり突っ込んだ文法の知識とスペイン語圏の文化に関する様々な知見を提供したことに尽きる。（ただし、スペイン語の実践については初級の授業では確かに犠牲にせざるを得なかったことは認めざるを得ない。）

こうした、複数の教員による、複数の声（まさにポリフォニー！）を通して教えることの良さは、今後も確実に残していかなければ、と考えている。ただ、そのやり方としてどのような方法があるかは、今後検討していかなければならない。数回に一度、大教室で合同で授業をしたり、

あるいはいっそのことZOOMを使った合同授業を行う、などの方法も考えられるし、文法の進度を同一にしておいて、数回に一度、教員が入れ替わる、といったやり方も考えられるだろう。さらにいえば、進度（そして成績評価方法）が同じであれば、ある時間帯に開講される科目の中で、文法を特に重視したい人はA先生、会話の練習を頑張りたい人はB先生のところに（ある程度）自由に移動して良い、というやり方も考えられる。もちろん一部の教員に人気が集まりすぎてしまっては困るが、それについてはある程度人数に制限をかければ調整が可能であろうし、不人気の先生がいたとしても、それはそれで、比較的人数が少ないというメリットが生まれるように思われる。

2）オンラインリソースの活用

2020年度からのオンライン授業の経験によって、筆者はさまざまなツールを学んだ。（「それ以前はそんなことも知らなかったのか」というお叱りの声が聞こえてきそうだが、ご寛恕願いたい。）本稿ではそうしたリソースと、それをどのように活用していくつもりか、について述べていきたい。

2a Google Formを使った授業のコメント

2020年度の後期から、Google Formを使って毎回の授業のコメントを出してもらうようにし、それを持って出席を確認するとともに、成績評価の材料にもした。これによって、学生さんの理解の程度（特にどこが伝わっていないのか、誤解を招いていないだろうか）がわかり、また好意的なコメントは教員の励みにもなった。（もちろん学生の要望や授業内容への批判にもできる範囲で真摯に対応した。）ZOOMを通じたオンライン授業で学生の顔が見えない中、学生のフィードバックは貴重な、そして非常時のメール等の連絡をのぞいては唯一のコミュニケーションツールであり、今後も活用していかなければ、と考えている。

2b オンライン教材の充実

筆者はオンラインでの授業を録画しておいて視聴可能とすることには強い抵抗を感じていて、大学全体の方針に反して、現在も録画は作成していない。最後の授業のみ記録（記念？）のため、授業を録画した。本稿執筆にあたってその理由についてふたたび考えたが、授業ではさまざまなハプニングがおきるため、それを記録することには抵抗があり、だからといって録画をするとなると余計な緊張感を強いられること、があげられる。つまり、録画を前提とすることで強いられる緊張感を、リラックスして学生の皆さんに学んでほしいと常々考えている授業の環境に持ち込みたくない、というのが、理由であったように思う。言い換えれば、毎回授業参観のような授業をするのはいやだ、ということだったのだろう。

ところが後述のように、後期に非常勤先の慶應義塾大学で、事情があって事前収録をしなければいけない回があり、必要に迫られてやってみたところ、学生の皆さんにも好評で、その有用性に（遅ればせながら）気がついた。最初から収録をする、と決めて行えば、もちろんその時間は緊張するが、ライブ感はもともと意識する必要はないので、淡々と文法事項の解説を進めればいいため、実際にやってみたらそれはそれでなかなか快適であった（画面共有のみで収録する分には、自分がどう写っているかを気にする必要もない）。これまで使ったことはないが、録画の一時停止機能を使えば、一息入れることもできるし、もちろん編集を駆使していらっしゃる先生もたくさんいらっしゃるだろう。

学生さんのコメントでは、聞き取れなかったところを巻き戻してみることができたのが良かった、という評価のほか、それまでのようにハンドアウト（パワポ）も配布してほしい、という声が聞かれた。そのような要望にも今後対応し、また対面授業ないし ZOOM を使った双方向授業と組み合わせ、そちらで質問を受け付けたり、ライブのやり取りの中でいろいろな例文を提示したりしていくことで、授業をよりよいものにしていけるのではないか、との手応えを得ている。

本稿執筆時点ではまだ慶應の授業でしか行っていないが、今後はさまざまな形でこの可能性を広げていきたい。例えば、現在私たちは東工大用の新しい教科書を作っているが、その教科書についての解説動画や発音練習用の資料、そして教科書本文には載せられないような詳しい文法資料や、問題そして教員用小テスト素材などの補助教材を載せていけば、学生の皆さんにとってすばらしい学習のための環境を提供できるのではないか。実は私がお手本として考えているのは、現在東京大学名誉教授の上田博人先生が、東大で2015年まで使われていた共通教科書『ディメロ（Dímelo)』の学習支援用のウェブサイト[2]で、ここには解説動画を除けば、前述したすべての補助教材がそろっている。上田先生の作られたものの足元にも及ばないかもしれないが、先生方のお力をお借りして、これに類するものを、東工大、そしてこの教科書を使って下さる全国の学 生の皆さんのために、今後作っていきたいと考えている次第である。

3) 評価（ペーパーテストに戻れるのか？）

筆者は2019年度までは成績評価をペーパーテストで行ってきた。しかし2020年度、東工大の初年度においては、オンライン授業ではテストを行うことが難しかったこと、そして発音練習を重視してきたことから、毎回のコメントと発音課題をベースとし、それに加えて授業の内容の振り返りやスペイン語圏の文化や社会をテーマにした期末レポート（第1, 3クオーターはオプション、第2, 4クオーターは必須）でつけるという方式をとってきた。授業でなるべく発音練習の時間を設けるのに加え、2020年度後半からは、永田先生のご友人が発音課題のお手本を録音してくださるなどして、少しずつ学生さんたちへの便宜をはかってきた。

こうしたやり方のよいところは、今後対面授業が復活し、ペーパーテストが可能になっても、ある程度残していくことができれば、と考えている。毎回のコメントをGoogleFormで送ってもらうのはこれからも続けていきたいし、発音課題も練習の成果が出やすく、レポートも自分でテーマを選んで楽しんで取り組めるということで、学生の皆さんにも好

評であり、語学の基本は単語や動詞の活用などの文法事項を覚えることであり、そうした知識があってこそ、次の言葉を実際に使うという段階に進めるのだ、ということはよく理解しているが、そうした暗記中心の学生に負荷をかけるやり方が、多くの挫折と語学嫌いを生んできたことも確かであり、こうした活動を通じた評価方法のほうが、むしろ学生のニーズに合っており、彼らの学びを深めてくれるのではないか、とさえ考えるようになっている次第である。これについては、テスト理論などの評価の研究を、今後もう少し勉強して、学生のモチベーションを高めてくれるような、そして彼らの努力が報われるような、新しい評価方法を考案していきたい。

おわりに

本稿は2021年度のスペイン語の授業について、12月はじめの時点で振り返ったものである。東工大のスペイン語元年となった2020年、コロナという偶然によって必要に迫られてはじめた合同授業という方式が少しずつ進化していった過程、そしてその中で我々教員がどんなことを学び、授業のやり方を少しずつ変えていったのか、について、特に2年目にもさまざまな進化があったのだ、ということをここまで述べてきた。

最後に、著者が非常勤講師として携わった、慶應義塾大学法学部での授業についても、簡単に触れておきたい。慶應義塾大学では、2年生向けの授業を担当した。春学期開始当初は、オンラインでの授業を隔週とし、授業のない回はそれほど負担にならない課題をやっておいてもらう、という形をとった。ただでさえ慶應法学部のスペイン語は進度が早いが、1年時がオンライン授業であったため、文法の理解に自信を持てなかったという学生の皆さんに、丁寧な復習は好評であったように思われる。

それに加えて、毎回の授業でコメントを書いてもらったり、また筆者がこれまで書いてきたラテンアメリカの政治と社会についての論文を読んでもらってレポートを書いてもらったりするうちに、もちろん全員ではなく一部の学生さんについて、ではあるが、学生の皆さんとの距離が

少しずつ縮まっていくのを感じた。むしろ35名前後の学生を相手にしていると、対面授業のときよりも、メールやZOOM授業終了後のやりとり等は、深まったのではないか、とさえ感じた次第である。(なお、慶應義塾大学においてはかなり長い期間、土曜日の2限と3限に授業を行っていた。そのときは人数も受講人数も少なく、昼休みに教室にいると学生さんとの対話も生まれていたが、そういう状況でもなければ、なかなか学生さんと話をする機会もない、というのが実感である。)

慶應での授業についてはもう一点、オンデマンドのよさを知るきっかけをもらったことを、学生の皆さんへの感謝とともに記しておきたい。前述の通り、11月のある授業で、どうしても都合がつかず、オンラインで動画を視聴してもらうという回が生じてしまった。当日にそのことを決め、あわてて収録を済ませたが、用事を済ませて帰宅してみると、すでにかなりの数の学生のみなさんがGoogleFormにコメントを書き込んでくれていた。オンライン授業であっても、そしてオンデマンド授業であっても、学生の皆さんに何かが伝わっているという実感を得られたのは、本当にありがたいと思ったし、大げさな言い方かもしれないが、感動的な経験であった。

また、私はZOOMでの授業を録画しておくことには抵抗があったが、オンデマンドのためと決めて収録する分には気分的にもそれほどプレッシャーを感じることもなく、子供が寝ている早朝や深夜などの時間帯に集中して授業ができるのはありがたかった。東工大では今後、スペイン語の教科書を作成する予定であるが、学生の側から見てもこのような文法解説の動画があれば、授業で集中力が切れてしまった時間帯があったとしても、復習に使えるなど、いろいろと有用性があるだろう。また、この教科書は市販される予定のため、教科書会社とも連携してこうした動画を配信すれば、学生の皆さんにも、教科書を使って下さる先生方にも、役立てて頂けるのではないか。

＊＊＊

「はじめに」でも述べたように、このようなオンライン（遠隔）授業の方法論については、すでに研究の蓄積がある。筆者はこれまで、こうした研究をほとんど参照することなく、実践者として試行錯誤を繰り返してきた。アカデミックな世界に働く人間として、こうした態度は単なる勉強不足なのかもしれない。しかしその一方で、筆者自身が先生方や学生さんたちとともに経験してきたことだからこそ、この経験について「ぜひ報告しなければ」と思ったというのも事実である。本論文で扱った再帰動詞の「主語は目的語でもある」ことのアナロジーで言えば、大学の教員というのはこうした文章の中において、書く人・読んで学ぶ人であり、情報提供者でも、教育という行為を実践する者でもあるといった、さまざまな役割を持っている。このような大学における授業報告は、もっと書かれていいのではないか、そして評価されていいのではないか、と、筆者は常々（特に、以前このような授業報告を教育系の雑誌に投稿して、学術的な貢献がないとリジェクトされて以来）考えている。本稿がスペイン語という科目に限らず、語学、あるいはそれ以外の科目をご担当される先生方や、学生の皆さんなど、なるべく多くの人の目に触れることで、授業についてのさまざまな工夫がなされること、そして「こんな授業の仕方もあるらしいですよ」という学生からの声が上がることで、学生の目線に立った授業の実践が少しでも増えてくれること、さらには、このような形の先生方の授業報告を読ませて頂く機会が増えることを（そしてぜひそうしたご経験を自分でも授業に取り入れさせてもらえることを）、願っている。

注

1）他の多くの大学では、大教室の講義科目をオンラインで行うため、外国語科目を早めに対面授業に戻したところが多かったようであるが、東工大では実験科目を対面で行うという事情もあり、第二外国語学

科目は2021年度いっぱいまで、オンラインで行われることが早い段階で決定された。

2) https://spanish.ecc.u-tokyo.ac.jp/dimelo/（2021年12月1日参照）

参考文献

〈コロナ禍のもとでの大学のオンライン授業について〉

熊本大学教授システム学研究センター 2021「オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言（2021.3）」熊本大学教授システム学研究センター（https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/rcis-2/proposal/proposal-1/）.

〈東工大での使用した教科書〉

テジョ・マロト 1982『スペイン語12課』白水社。

二宮 哲 2014『スペイン語文法の要点』朝日出版社。

〈授業中に推薦した参考書及びスペイン語や言語について知るための文献〉

上田 博人 2011『スペイン語文法ハンドブック』研究社。

岡本 信照 2018『スペイン語の世界』慶應義塾大学出版会。

伊藤 亜紗（編）2021『「利他」とは何か』集英社新書。

國分功一郎 2017『中動態の世界―意志と責任の考古学―』医学書院。

――― 2020「自著紹介『中動態の世界―意志と責任の考古学―』」東京大学教員の著作を著者自らが語る広場（https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/、2021年12月1日参照）。

東京外国語大学言語モジュール「中動態」（http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/grammar/gmod/courses/c02/lesson01/step49/card/039.html、2021年12月1日参照）。

中島 岳志 2021「与格－ふいに　その1」ミシマ社ウェブ連載「利他的であること」（https://www.mishimaga.com/books/ritateki/002920.html、2021年12月1日参照、『思いがけず利他』として同社から書籍化）。

〈著者によるこれまでのスペイン語教育に関する文章〉

渡辺 暁 2012「地域研究者として教える第二外国語 — ラテンアメリカ研究とスペイン語教育のあいだ —」『青山スタンダード論集』第 7 号、107-122。

——— 2017「教養教育としての第二外国語教育—東京大学 2015 年度秋学期（A セメスター）の授業の記録から—」『高等教育と国際化——山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』第 3 号、28-32。

——— 2018「予期せぬ科目誕生の記録—山梨大学スペイン語カリキュラムの創設過程 (2012-18) を振り返って—」『高等教育と国際化——山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』第 4 号、52-58。

——— 2021a「コロナの時代の語学教育—東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録—」『ポリフォニア』第 13 号、73-90。

——— 2021b「第二外国語としてのスペイン語の開講にあたって—新任教員のご挨拶—」『外国語だより』（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院外国語セクション）第 5 号、25。

Watanabe, Akira. 2012. “La resonancia entre los estudios de área y la enseñanza de la lengua: cuando un politólogo da clase de español como segundo idioma,” conferencia magistral, 1er congreso internacional de investigación y ciencias educativas, Universidad Autónoma del Carmen.

———. 2014. “Throw away the Textbook and Get a Paperback Instead: Reading García Márquez Short Stories and Sandra Cisneros’s La casa en Mango Street in Spanish with Limited Vocabulary and Grammatical Knowledge,” *The Journal of Literature in Language Teaching*, 3 (1), 8-19.

渡辺暁・山崎太郎 2021「対談：新しい第二外国語、スペイン語をめぐって——チェスとスペイン語と移民研究——」『外国語だより』（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院外国語セクション）第 5 号、3-10。

付録：ネット上の動画で学ぶスペイン語（増補版）

（注：『外国語だより』では、紙幅の都合で映画編は完全にカットし、ネット動画のみを紹介しました。この「付録」バージョンでは映画編を加え、またネット動画についても、特にスポーツの動画の部分をかなり加筆してあります。）

東工大のスペイン語の授業では、動画や映画を多用しています。選ぶ基準は、大変主観的ですが、講師である筆者が面白いと思ったもの、ということになるかと思います。もちろん、例えば動詞の未来形をやるときには、その台詞や歌詞がでてくるこの動画、など、文法とリンクさせようと考えていないわけではありません。しかしそれ以上に、私が面白いと思う、学生さんたちに見せたい、と思う動画、というのが、どうしても基準になるのです。（正直ベテラン教員の私に言わせれば、ある程度の長さの動画を見せれば、その日あるいはそれまでの回で習った文法事項と関連づけて学生さんに説明できるようなフレーズはどこかに転がっています。）

ここではそうした映像の一部を、映画とネット上の動画の二つのカテゴリーに分けて、ご紹介します。若い皆さんが関心を持ってくれるかどうかはわかりませんが、参考にして頂けたらと思います。もちろんこれ以外にも面白い動画はたくさんありますので、ご自分でいろいろと探すためのとっかかりとして、活用して頂けたらと思います。

なお、映画の部分がどうしても長くなってしまったので、ネットで手軽に見られる動画についてとりあえず知りたい、という方は、その部分は飛ばして下さい。また、最近ではテレビ放送に代わって、もはや動画配信のメインストリームともいえるNetflixにも、『ナルコス』や『ペーパーハウス』のような、スペイン語圏生まれの大ヒット番組はたくさんありますが、そちらは見たことがないので、ここでは扱いません。

1）映画

スペイン語の大きな特徴は、話されている範囲が広い、特に話されている国が多い、ということです。また、それらの国の多くが、社会的・政治的な問題を抱えている、というのも事実です。スペインという国は1930年代に内戦を経験していますし、中南米の多くの国々でも、独裁や政治的な暴力などの問題を抱えてきました。映画や歌などの芸術作品も、そうした社会情勢と密接に関係しています。ここではそんな映画をいくつか紹介していきます。手に入るかどうか、チェックできていませんが、いずれは東工大にもメディア（DVD）を少しずつ揃えていきたいと思っています。

El diario de motocicleta

ラテンアメリカを知るための映画としてまずご紹介したいのが、『モーターサイクル・ダイアリーズ』です。アルゼンチンのブエノスアイレスで医学（と生物学）を勉強する若者二人が、南米大陸をバイクで一周を目指して旅をはじめ、その中での様々な経験を通して、社会的な不平等・不公正に目覚めていくという話で、主演の二人はメキシコのガエル・ガルシア＝ベルナル（最近だとディズニーの『リメンバー・ミー』のエクトル（ヘクター）役でも活躍しました）とアルゼンチンのロドリゴ・デラセルナ、監督はブラジルのワルテル・サレス、制作はみなさんももしかすると名前を聞いたことがある、ロバート・レッドフォード、作中で巡った国は、アルゼンチンを出てチリを経由してペルーへ、そして最後はベネスエラでお別れ（途中アマゾン川流域のコロンビアも少しだけ映る――実際そこで撮影したかはわかりませんが――）と、国際色豊かな映画です。

El espíritu de la colmena / El sur

次に紹介するのは『ミツバチのささやき』というスペイン映画です。フランコ将軍による独裁政権末期に作られた映画で、幼い姉妹が主人公

ですが、話の中に内戦で敗れた側の兵士が登場するなど、政治的な内容も込められています。学校で、ドン・ホセという人形を使って人間の臓器の勉強をするシーンがあるのですが、そこでも「ドン・ホセに足りないのはなんですか？」「心（臓）です」、あるいは、「これで目が見えるようになりましたね」などの、ダブルミーニングのセリフが色々と出てきます。(El espíritu de la colmena Víctor Erice don José（アクセント記号はなくても可）で検索してみて下さい：字幕はありませんが、YouTube で見ることができます。）同じ監督さんの「エルスール（＝南)」という作品も、内戦を経験した父親を、一人娘の視点から描いた、とても美しい映画です。

La historia oficial / El secreto de sus ojos / Chiamatemi Francesco

アルゼンチンも 1976 年から 83 年まで、苛烈な軍事独裁政権を経験しました。このときのことを扱った最初の映画が、アカデミー賞外国語映画賞をとった「オフィシャル・ストーリー（原題＝ La historia oficial：スペイン語では historia という単語は history と story の二つの意味を持っています)」です。主人公の歴史教師の女性が、自分の娘（養子）の出生の秘密を探ることを通して、軍事独裁政権の暗部を暴いていく、というストーリーが、政権の崩壊とともに描かれます。

2009 年のアカデミー賞外国語映画賞をとった『瞳の奥の秘密』は、その軍事政権が始まる数年前が舞台です。引退した捜査官が 1999 年の時点から、25 年前の 1974 年に起きた未解決の殺人事件を振り返り、その謎に迫っていくというストーリーで、軍事政権が始まる以前から、非公式の秘密警察的な力組織があり、市民に対する暴力が行われていたことが暴かれています。また、2015 年に制作された『ローマ法王になる日まで』では、アルゼンチン出身のローマ法王フランシスコの半生が描かれていますが、軍事政権時代にカトリックの司祭として密かに抵抗運動を支援していた、という話がストーリーの大きな部分を占めています。

María llena eres de gracia / La sierra

コロンビアの麻薬カルテルのことを描いた映画もあります。最近はあまり授業では活用していませんが、『そして一粒のひかり』（原題は英語でいうと Maria Full of Grace：聖母マリアに捧げる祈りの最初の一節です）という映画は、ふとしたことから麻薬の運び屋になる 17 歳の少女を描いた作品です。コロンビアの田舎と首都ボゴタ、そしてニューヨークのクイーンズ（実際多くのコロンビア人が住んでいます）のコントラストが、私にはとても印象に残っています。例えば映画の冒頭で、主人公のマリーアはバラを包装する工場で働いているのですが、ニューヨークの街角で、そのようにして作られたであろう、バラの花束が売られている、という具合です。

また、コロンビアの自警団（autodefensa）という、ゲリラとも警察とも違う暴力組織のことを扱ったドキュメンタリー *La Sierra* も、Youtube で英語字幕で見ることができます。自警団のリーダーが「この町を良くしたいんだ」と都市計画を語るところなどは、ある意味、日本の戦国時代の武将もそうだったのかな、と妙に納得してしまいます。（こちらは英語字幕で、YouTube に全編上がっています。ちなみにコロンビアの麻薬戦争の過程では、パブロ・エスコバルという有名なギャングのリーダーがいて、彼の生涯を描いたドラマが Netflix で人気シリーズとなり（邦題は『パブロ・エスコバル：悪魔に守られた男』。彼の人生は、他にも映像化されています）、それを見た海外の視聴者が舞台となったメデジンに押しかける（The Guardian, “Narcotours: Netflix fans uncover the real life of Pablo Escobar,” YouTube）、といった現象も見られ、彼を英雄視しないでほしい、という地元の人のコメントを読んだことがあります。まだその番組が見られるようでしたら、そんなことも念頭に入れながら、見てもらえたらと思います。

ちなみに、コロンビアからは離れますが、ギャングを取材したドキュメンタリーとして、エルサルバドルのマラ・サルバトルーチャを取材した La Vida Loca という映画もあります。「エルサルバドルでは公開しない」

という約束で撮影されましたが、結局（当然といえば当然ですが）公開されることになり、監督は裏切り者として殺されてしまいました。DVDを持っていますが、正直いうと怖くて、まだ見たことがありません。

スペイン語字幕付き日本アニメ：youtubeには日本のアニメ作品がよくアップされていますが、実はそこにスペイン語の字幕が付いていることがあります。おそらく、スペイン語圏のファンがつけたものと思われますが、こうした動画がスペイン語との最初の出会いだった、という学生さんは、結構いらっしゃいます。またこれに関係して、メキシコのお笑い番組 *El chavo del ocho* の日本語吹き替え版（スペイン語圏のどこかの国にある日本語学校の自由制作課題らしいです）、というのも、見たことがあります（el chavo del ocho japonés などで検索）。

インド映画：実は私はインド映画が大好きで、飛行機に乗るときは（最後に乗ったのはもうかなり前ですが）機内で見たり、日本で出ていて評判がいいのはDVDで購入したりします。アメリカ留学時代に、インド人の映画研究者の方の講演を聞いたのがきっかけで、好きになりました。（映画を授業で多用するのはその方の影響です。）そのときに見せていただいた、「たとえ明日が来なくても」そして語学の学習がテーマの一つになっている *English Vinglish*、その二本のニューヨークを舞台にした映画は、スペイン語の授業でもこっそり流したりしています。

ジャマイカ映画：大昔、東京写真美術館でアフリカ映画祭というのがあり、そこで *3rd World Cop* という映画を見ました。かなり過激な警察映画だったのですが、字幕がなく、通訳の方（二人とも女性）が、けっこう乱暴な言葉遣いでリアルタイムで通訳をされるという得難い経験をしたこともあって、その存在を覚えていたのですが、その後米国に住んでいたときに、DVDを買うことができました。ジャマイカ訛りがすごいところだけ英語の字幕が入っているのですが、正直それ以外の部分もあま

りわからなかったりします。ジャマイカの英語をレゲエ以外で聞くチャンスはなかなかないと思います。インド映画の英語とあわせて、世界の様々な英語に耳をかたむけてみて下さい。(英語は、イギリス英語・北米英語・オセアニア英語、だけではありません！) ちなみに映画のキャッチコピーは、"We run things, things don't run we!" です。

2) ネット上の動画

映画はもちろん手間がかかっており、教材としてもうまく使えば非常によいものになるのですが、必ずしも手に入るかどうかはわかりません。そのため以下では、YouTube で気軽に見られる動画を紹介します。URL は書いてありませんが、その代わりに検索用のキーワードを紹介しておきます。

なお、ここでご紹介する動画は、聞き取りやすさなどの教材としての適切さというより、内容や面白さ重視で選んでいます。まずはこうした動画でモチベーションを高めてもらい、少しでも聞き取れる・わかる部分を増やしていってもらえたら、と思っています。

スポーツ

サッカーやテニス、自転車など、スペイン語圏の選手が活躍したり、またスペイン国内リーグが強いスポーツ競技のおかげで、スペイン語に興味を持ったという人も多いと思います。興奮が伝わってくるスペイン語での実況や、好きな選手のインタビューを聞き取れたりしたら、うれしいですよね。私のおすすめの動画は、メッシ選手の 2015 年スペイン国王杯決勝戦 (Messi gol 2015 copa del rey などで検索) と 2014 年ワールドカップでのボスニア戦でのゴールシーンの実況です。アナウンサーがどんなことを言っているかを授業で解説したりしています。

また、2010 年のワールドカップでスペイン代表が優勝しましたが、その一年後に放映された回顧番組もおすすめです。(El gol de Iniesta Mundial Sudáfrica 2010 というタイトルで Youtube にあります。2011 年 3

月26日公開、長さは2:03です。）選手たちが当時を振り返ってコメントをしていく、というもので、イニエスタ選手の落ち着いた語り口、そしてトーレス選手の「みんなのゴール（el gol de todos）という一言が私は大好きです。

有名選手のインタビューでは、やはりイニエスタ選手のものが、話し方がゆっくりで聞き取りやすいと思います。実際にJリーグの中継を見たわけではないのですが、一部でもいいので、字幕や通訳を頼りに聞き取りにチャレンジしてみるといいと思います。また、今年（2021年）の第4クオーター最初の授業では、7回目のバロンドール賞を受賞したメッシ選手のスピーチを取り上げました。仲間や家族への感謝、そしてもうひとりの有力候補と目されていたレヴァンドフスキ選手への敬意など、短い話の中にたくさんの要素が盛り込まれた素晴らしいスピーチで、スペイン語という面では、アルゼンチンのスペイン語の特徴がよくわかります。最後に、女子のバロンドールに輝いたバルセロナのアレクシア・プテーヤス選手のスピーチも感動的でした。発音も聞きとりやすく、来年度以降も授業で使おうと思っています。ぜひ視聴されることをおすすめします。

野球ファンの皆さんにおすすめなのは、今年（2021年）大谷翔平選手とホームラン王を争った、ブラディミール・ゲレーロJR選手（カナダ生まれ、ドミニカ共和国育ち）と、サルバドール・ペレス選手（ベネスエラ出身）のスペイン語です。ふたりともカリブ海スペイン語地域のスペイン語で、かなり聞き取りにくいものの、スペイン語の語彙が頭に入っていれば、そこそこ聞き取ることができます。また、ペレス選手は英語もカリブ海スペイン語なまりそのままで、失礼な言い方かもしれませんが、英語の発音が苦手な私たち外国人に勇気を与えてくれる存在です。

最後に忘れてはならないのが、日本人選手のスペイン語です。大谷選手やダルビッシュ選手はよくわかりませんが、イチロー選手のスペイン語は、ウォール・ストリート・ジャーナルでも取り上げられたことがあります（Aug. 29, 2014）。その記事によれば、同じ米国における「外国人」として親近感をもっており、出塁して一塁手がヒスパニックの選手だと

スペイン語で話しかける、とのことでした。YouTube では、2021 年 4 月に行われた、ドジャースの 2020 年のワールドシリーズ優勝を祝う、優勝記念指輪贈呈のセレモニーで、友人のリオス選手に流暢なスペイン語で「おれにその指輪をくれ」と言っているシーンを見ることができます(ichiro suzuki Edwin Ríos で検索)。

また、横浜ベイスターズから大リーグに移籍して活躍する筒香選手も、横浜時代からドミニカ共和国のウィンターリーグに参加し、スペイン語を勉強して、ラミレス監督ともスペイン語で話していたそうです。彼のことを紹介する日本のスポーツ新聞の記事に、「パララカエ」という、ホームランを意味するという謎のスペイン語の単語がカタカナで紹介されており、それが「para la calle (= to the street)」つまり場外ホームランであることに気づくまで、頭をフル回転させたことを覚えています。

音楽

ネットのおかげもあって、いわゆるラテン系の音楽や、スペインの伝統音楽やフラメンコなど、スペイン語圏の様々な音楽にふれる機会が増えていますが、歌というのは、語学の学習にとてもよいツールです。東工大に教えに来てくださっている、東工大で授業を担当して下さっている木村秀雄先生（東京大学名誉教授）は、歌にはリズムがあり、いい曲であればそのリズムが歌詞のスペイン語のイントネーションによく合っているので、いい歌を歌うとそれだけで発音のいい勉強になる、と、常々おっしゃっています。

スペイン語圏には数多くの名曲があり、名歌手がいますが、ここではキューバ生まれの大歌手、セリア・クルス（Celia Cruz）さんのことを紹介しておきます。彼女はキューバ革命後にアメリカに移住し、アメリカのヒスパニック社会を中心にスペイン語圏全体で愛された人です。セリアさんの晩年、彼女を称えるために広大なスペイン語圏の国々から集まった人気歌手たちが、彼女のヒット曲を歌ったトリビュート・コンサートの映像を、YouTube で見ることができます（celia cruz azucar

homenaje completo で検索すると、コンサート全体の映像が見られます)。その最後、ヒット曲 Yo viviré（私は生き続ける！）を歌手の皆さんたちがメドレーで歌っているシーンを、毎年授業のどこかで見せるようにしています。(なお、歌の練習に一番おすすめなのは、Tu voz (=Your Voice) という曲です。このコンサートの中では、メキシコの人気歌手、アナ・ガブリエルが歌っています。)

スペイン語のいいところは、広いスペイン語圏に様々な歌のスタイルがあること、です。例えばタンゴの名曲ボルベール（Volver = 帰郷）は、元は 1935 年にタンゴの神様と言われたカルロス・ガルデル（Carlos Garcel）が歌った曲ですが、2006 年にはそのフラメンコバージョンが、スペインの映画監督アルモドーバルの同名の映画（ボルベール）の劇中歌として使われ（Penélope Cruz Volver などで検索)、また、メキシコの人気歌手ルイス・ミゲル（Luis Miguel）にもカバーされています。このように、一つの名曲が時代や地域を超えて歌い継がれていく、というのは、スペイン語の素晴らしいところだなあと思います。

料理

スペイン語は多くの国で話されていて、それらの国々は独自の食文化を持っていて、さらには世界的にもおいしい食べ物や料理で有名な国々です。今は閉店しましたが、スペインにあった El Bulli（エル・ブジ）というレストランは、長いこと世界一のレストランとして知られていました。そのエル・ブジのシェフとして知られるフェラン・アドリア（Ferrán Adriá）や、ペルーのガストン・アクリオ（Gastón Acurio）らは、スターシェフとして知られていて、彼らの名前を検索するだけで、多くの動画が出てくると思いますが、それ以外にもたくさんの動画があります。

・スペイン料理のレシピ（receta）

En casa contigo というスペインの女性向けサイトの料理コーナーが私のお気に入りです。特に tortilla española（スペイン風オムレツ）の回は、

毎年どこかのタイミングで授業でも使っています（tortilla española en casa contigo で検索）。パエージャ（paella = パエリア）やガスパチョ（gazpacho）などの有名な料理になれば、たくさん動画が上がっていますが、少し見て、気に入ったものを見てもらえたらいいのかな、と思います。パエージャならバレンシアが本場なので、paella valenciana というキーワードで検索したり、本物の、という意味の、auténtica という言葉を追加すると、また別の動画が出てきたりするかも知れません。また、最初にご紹介した en casa contigo のようなお気に入りのサイトを見つければ、そこでいろいろな料理の動画を見ることができると思います。

・ペルー料理

ペルーの食文化は、もともとのアンデスの先住民文化、征服によって持ち込まれたヨーロッパの文化に加えて、19 世紀以降入ったアジアの文化がまざって生まれたものです。チャウファというお米料理（chaufa：もちろん炒飯が原型ですが、今や完全にペルー料理！）もありますし、ロモサルタード（lomo saltado）という料理も、具材はともかく（牛肉やフライドポテトが入っています）、調理法は中華の影響をはっきり受けています。

日本とのつながりもご紹介しましょう。まずは cocina nikkei（ニッケイ = 日系、cocina = 料理）ということばが定着しているということに、みなさん驚かれるかと思います。そして日本人シェフといえば、1974 年にペルーに渡り、2016 年に亡くなった小西紀郎（Toshiro Konishi）さん。”Sonidos y Sabores del Mundo – Toshiro Konishi” では力強いスペイン語で料理の話をされ、歌まで歌ってらっしゃいます。他にも和食・ニッケイ料理で有名な方はたくさんいらっしゃいますが、お一人だけ、Tomás Matsufuji さんという方をご紹介したいと思います。彼のセビーチェ（魚介のマリネ）の店、”Al Toque Pez” の動画を見ていると、お客さんたちの楽しそうな様子が伝わってきます。最初に紹介したガストンさん（彼の人気はスポーツ選手並みだそうです）も含め、彼らの名前を検索すると、

いろいろな動画が出てきます。ペルーの食文化に加えて、それを取り巻く社会の様子を垣間見ることができて、とても面白いと思います。

・メキシコ料理

メキシコ料理、私は留学していたこともあって大好きです。おすすめしたい動画もたくさんありますが、まずは私たちがメキシコシティーに行くとかならず行くタコス屋さんをご紹介しましょう。ハマイカ市場というところにある carnitas paty というところです（tacos de carnitas mercado de jamaica で検索）。このメルカード（＝マーケット：もともとお花屋さんが集まっているので有名なところ）の様子も含めて、動画で見てくれるとうれしいです。

今年度の授業では、講師の永田夕紀子先生が、Netflix の Las Crónicas del Taco という番組（日本語タイトルは「タコスの全て」）、そして Youtube で人気になった、Lady Tacos de Canasta の名で知られる女性の動画を紹介して下さいました。彼女の「タッコオオオース」という掛け声はうちの子供達にも大人気です。（書きたいことがありすぎるので、あえてこれだけにします。また、アルゼンチンやカリブの国々などの食文化についても、ご紹介できなくてすみません。）

番外編：日本在住スペイン人シェフの料理番組（現在は見られません）

日本在住のスペイン人シェフで、ホセ・バラオナさんという方がいらっしゃいます。コロナの前まで渋谷・マークシティにあった、彼が経営するレストランを、いつも学生さんにお勧めしていました。その方がゼクシィ・キッチンというサイトで日本語で料理の解説をされていて、私はその番組が大好きでした。残念ながらもう見られませんが、彼の日本語のようなスペイン語を、私も話せていたらいいな、と常々思っています。

おわりに

最後にもう2つ、動画をご紹介します。一つは中米の先住民言語のマヤ語についての、“The complicated linguistics behind how the Maya talk about the past” という動画で、講師で言語学者の佐々木充文先生が教えて下さいました。スペイン語では動詞の過去形が二種類あるなど、時間のとらえ方が重要な文法のポイントなのですが、この動画はではどのように過去を表現するか、を説明していて、言語によってさまざまなやりかたがあることがわかります。

そして大トリは、タコスの動画をいろいろ物色していて見つけた、“Japonés haciendo tacos callejeros en japon! México cambió mi vida!” という動画です。日本に住むメキシコ人の Youtuber による、関東周辺でタコスの移動販売をしているやまとさん（実は私も何度かお会いしたことがあります。instagram: tacos_3hermanos_df）へのインタビュー動画で、2021年12月22日の公開されたばかりですが、2022年2月はじめまでにでなんと100万回再生を超え、コメント欄はスペイン語のメッセージで埋め尽くされています！

これ以上ネタを探していると Youtube 中毒になりそう、というところで、紙幅もつきましたので終わりにしたいと思います。自分がスペイン語を学んでいた頃のことを考えると、ネットを通じて無限の生きた教材に触れることができる皆さんはうらやましいです。CD がかろうじて手に入っても、歌詞はついておらず、ああでもないこうでもないと聞き取りを試みていたのが懐かしいです。さらに言えば、SNS などでスペイン語圏に友達ができれば、ふつうに会話もできます。現地に行けるようになるのはだいぶ先でしょうが、そんなすばらしい環境を活用して、ぜひ語学も身につけていかれてください。